ダウンタウン・ブック

メリー・ジェーンは秘密の言葉

ドリス・ヘフロン　石井清子訳

晶文社

著者について

ドリス・ヘフロン

カナダ生まれの女性作家。カクナワガのインディアン居留地は、子どもの時から非常に身近なものだった。学生時代に、ヨーロッパをヒッチハイクで一人旅。以来、イギリスに住み、現在はオックスフォードの教師である。二人の子どもたちと一匹の犬に囲まれて、若い人びとのための小説を書いている。

訳者について

石井清子（いしい・きよこ）

一九二五年、東京生まれ。東京女子薬学専門学校中退。翻訳家。

訳書―ジュリアス・レスター『すばらしいバスケットボール』（晶文社）、エレノア・クレイグ『あなたは聴いてません』（金沢文庫）、マイク&ドナ・ネイスン『タラ――小さな生命の詩』（三笠書房）、ソル・ゴードン『ハンディキャップを超えて』（佑学社）、フランシナ・グラース『マービンとタイジ』（KKベストセラーズ）ほか。

ダウンタウン・ブックス

メリー・ジェーンは秘密の言葉

一九八一年七月二五日発行

著者　ドリス・ヘフロン

訳者　石井清子

発行者　株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二-一-一二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・五五局四五〇一

振替東京六-六二七九九

あづま堂印刷・美行製本

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします。

メリー・ジェーンは秘密の言葉

ドリス・ヘフロン　石井清子訳

ダウンタウン・ブックス

晶文社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Dorris Heffron :
A NICE FIRE AND SOME MOONPENNIES
Original Copyright © 1971
by Dorris Heffron
Japanese translation rights arranged with
Dorris Heffron,
% Bolt & Watson Ltd., London
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

メリー・ジェーンは秘密の言葉

ブックデザイン　平野甲賀

登場人物

メイジー・マッコンバー　カナダ・インディアンの娘。十六歳。冒険好き。
ドジット　メイジーの愛犬。
ハリー　メイジーの父親。教師。モーターバイク事故で死亡。
オータム・サン　メイジーの母親。糸を秋の色に染めてタペストリーを創っている。
モーリイ　カトリックの司祭。オータムにお熱をあげている。
フィッツ　メイジーの高校のファッション・リーダー。
ステファニー　メイジーの親友。
バーニイ（またの名サー・バルナバ）　ヒッチハイク中に出会った素敵な男性。
ゼルビイ&ゴノビッチ　自然食信奉者の若い夫婦。二人ともクィーンズ大の学生。
ジャスパー　メイジーのボーイフレンド。トロント大の学生。
ピイアス　ヨークビルの街で出会った、「メリー・ジェーン」の秘密を握る男。
ソニア　グラマーな混血インディアン美人。ウェイトレスをしながら勉強中。
キット　ソニアのルームメイト。正義感の強いソーシャル・ワーカー。

1

さて、わたしはメイジー・マッコンバー、十六歳のインディアン娘。はじめにこのことをはっきりさせておいた方がいいと思うわ。つまり、わたしがインディアンだということ。これは事実なのだもの。でも年齢のことは大して重要じゃない。というのは、わたしは十五歳から二十一歳までいろいろに見られているから。わたしの年齢を当てるのは難しいらしい。なかなか当らない。これはほんとうだ。それはわたしが数多くの経験を積んでいるからだと思う。年齢というのは、どんな経験を重ねたかによってきまるのじゃないかな？

その点、わたしはとても数多くの経験をしてきた。他人とちがった経験をいろいろと、ね。まず十三歳になるまでインディアン保護地区で育てられた。このことは「他人とちがった体験をす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

る」という点からすれば、すばらしい出発点だったと思う。そうでしょう。わたしの場合はインディアン保護地区からはじまって、さまざまな体験を積んだというわけ。変った体験をするとなると、いつもわたしは夢中になった。体験狂っていうのかな、すばらしい新しい経験をすることが、何よりも好きなのだ。そのためには道を踏みはずしちゃってもいい、新しい経験をしようと追いかけて行く。それがほんとうに面白くて、危険があまりない場合には、自分の道をはずれても、経験するために邁進するのだ。

人生とは、多くの経験の積みかさねだと思う。つまり、たくさんのちがった経験が人生そのものだ。だからほんとうに人生から最高のものを求めようと思うのなら、すばらしい経験を追いかけて生きなくてはならない。

以前、ステファニーといっしょに湖の岸辺に腰をおろしていた時のことを思い出す。ステファニーはわたしの友人で、ステファニー・マークスという名前だ。それはともかく、あの時はステファニーとわたしと彼女の犬、純血のコリー犬とで、地平線に沈む夕陽をながめていた。わたしたちは岸辺の大きな岩に腰をおろしていたっけ。まわりには人っ子ひとりいなかった。

湖は凪いで鏡のようだった。湖水の色は冴えたブルー、空は燃えたつように輝かしい落日の茜色を誇示していた。あの日の夕焼けはほんとうにすばらしかった。空ぜんたいが湖の上に映っていたっけ。

あの時わたしは地平線の象徴的な意味について考えていた。それは岸辺に腰をおろして目の前

の落日をながめていたからだけではない。わたしたちはちょうど十年生(日本では高校一年生)を修了したばかりで、夏休みが目前だし、そのあとに新学年度がひかえていたからだと思う。目の前に、時間が白紙の状態でよこたわっていて、それが多くの経験で充たされるのを待っている、そんな時だった。だからわたしには地平線がとてつもなく巨大ではてしないものに思えた。そして限りない可能性が燃えたつように輝く地平線の上をあらあらしく駆けめぐっていた。

「ほら、地平線を見てごらん!」わたしはステファニーにむかって叫んだ。

「まあ、ほんと、きれいねえ」

「きれいですって?! ものすごいじゃない! これまで見た夕陽のなかでいちばんすごい夕焼けだわ。燃えたつ炎にそっくりよ。もしそばへいったら暖かくて、まるでほんものの炎が踊ってるように見えるでしょうねえ。でもわたしが言ってるのは地平線のことよ。地平線をじーっと見てごらんなさい。怖ろしいほど無限に見えない? まるで可能性がどこまでもはてしなく続いてるように見えない? それはわたしたちの未来の年月、地平線の彼方に伸びひろがっているのはわたしの人生よ。強くはてしなくひろがっている人生そのものなんだわ!」

「へーえ? わたしにはただのまっすぐな線に見えるけど。それも細い線よ。たとえば壁と床の境の線みたいだわ」

「そうお。でも少なくとも今日はきれいな壁紙がはってあるでしょう」わたしは感じたままの気持を、あてこすりにならないように気をつけて言った。

とたんに、ステファニーは笑いだした。とてもウィットのある返事だと思ったのだろう。そこでわたしに一矢(いっし)むくいてきた。

「そうね。でも色があせてきたわ。壁紙の色があせてきたわよ。ほらね？　さあ、もうお夕飯だから家へ帰った方がよさそうねえ」

ステファニーは、時どき相手にがつんと一撃を与えるのである。そこでわたしは負けずに、はてしない地平線の彼方に無数の新しい経験がひそんでいることを、彼女に理解させようとするのだけれど、ステファニーの方では、地平線は壁と床とが接するただのまっすぐな細い線で、空は壁であるとがんばるのだ。

壁だなんて！　わたしはあの地平線を、壁と床の境界線とは思えない。ぜったいにそうは見えない。つまり、全然そんなふうには感じないのだ。わたしにはそれが未来の経験に見える。これから先、体験するだろうところの限りない、さまざまな経験の数々がそこにひそんでいるように思えるのだ。

これからお話ししようと思うのは、最近のわたしの体験談だ。実際、これはわたしの体験のなかでも最高の部類に入る、胸のわくわくするようなすてきな経験だった。

とはいっても……わたしは今まで一度ものを書いたことがない。だからきっとどのページも上手には書けないと思う。でもうまく書こうとしないで気楽に、たとえば日曜(サンデー)ドライバーかなんかの気分で書けば、きっと読んでもらえると思う。じゃあこれから始めます……。

そもそも始まりは、先月――十月だった。学校がおわるとすぐに、ドジットとわたしは公園をぶらついていた。わたしの家はキングストン西通り六一番地にある。キングストンの町をよく知っている人なら、わたしの家がマクドナルド公園の東側にあることがわかるでしょう。でも東側なのになぜ西通りというのか、わたしにきいてもらっても困る。たぶん我が家は公園の北東の方角にあたると思う。それは湖がだいたい南東にあたるから。それに北東というのは、真東よりもいくらか西よりだから。それで西通りと名がついたのかも。わからないけど。

とにかく片方に公園、もう一方に湖をかかえた、とてもすばらしい位置にある。こうした場所に建っている家というと、人は何か派手な邸を想像しがちだけれど、それはちがう。西通り六一番地の近くの家々はちがうのだ。しかしある時期はひどく大げさな家が多かった。それは言える。しかし今は玄関の軒は傾き、冬には水道管は凍って破裂するし、全体にしわがよってくたびれた感じの家が並んでいる。ちょうど年老いた巨人が歩道で行きくれている風情だ。

ただし、その家々には若い人たちがつめこまれている。あわれな古い家はだんだんにとりこわされて、たくさんの小さなアパートにたてかえられつつある。そして毎年九月にはクィーンズ大学の新入生が大勢入居する。学生たちでもりくりかえるのだ。週末の夜にその地区へ行くと、いつでも窓から出入りする学生の姿を見るだろう。実際、五ブロック離れたところでも、学生たちの騒ぐ声がきこえるくらいだから。

ここは住むにはひどいところだ。まったく……。オータムとわたしはこの土地での時代おくれ

の馬鹿者なのだ。つまり、いちばん長く住んでいるってわけ。わたしたちはアパートの地下室に住んでいるが、今年で約三年になる。オータムっていうのはわたしのママ。オータム・サンが正確な名前だけど、わたしはただオータムって呼んでいる。ドジットというのはこれから説明するけど、毛のもじゃもじゃした丈夫なかわいい雄犬。去年のクリスマスにモーリイがわたしのために野犬収容所からもらってきてくれた。

まあそれはともかく、その日の午後、ドジットとわたしはいつものように公園をぶらついていた。と突然、キャメロン・フィッツパトリックが見るからに怖ろしげな小男と何かしているのが目に入った。ふたりはわたしたちの所からだいぶ離れた垣根の近くにいたが、フィッツに間違いないことがすぐわかった。その服装でわかったのだ。

フィッツは、このあたりではいつもいちばんヒッピーらしい格好をしている。そして自分でもそのことを知っていた。放課後の彼女は、裸足(はだし)でひどく色あせたジーンズに、何かの花のプリントの上着をきて、ビーズの首飾りをいくつも下げている。そしてお祖母さんの頃に流行した縁なしの眼鏡を鼻の先にのせ、もつれた長いブロンドの髪をし、そこに時たまヘッドバンドをしている。フィッツは学校へ行く時の服装にも気をつけなくてはいけない。

実際、学校中の先生方が彼女に注目している。というのは全校生徒がフィッツに注目しているから。だから先生方も当然目を光らせて……気にしているのだ。フィッツというのは、いってみればファッションの面でのリーダー。まあ、ジャッキー・ケネディの二代目みたいね。だって当

時の女の子たちは、ジャッキーの服装――ノースリーブだとかAラインの服やなんか――を真似してたでしょう。そして今や皆がフィッツのファッションを真似してる。わたしはほんと言ってこれは進歩向上だと思うの。でも先生方はそうは思わない。去年の春、フィッツが裾のひろがったベル型のスラックスをはいて登校した時は大騒ぎになった。学校中で知らない人はなかったけど、わたしは当時フィッツと同じ十三年生だったジャスパーから、誰よりも早くそのニュースをきいた。ジャスパーは今トロントの大学に行っているけど、フィッツはまだ十三年生でいる。来年もきっと留年してると思う。そして、さ来年わたしが十三年生になった時もいるかしら。いるといいな。フィッツはこういう点では憧れの的なのだ。彼女は思ったことを何でも言う。でもたったひとつ、フィッツは全体のことを考えないのだ！

しかし自分が考えたことを言う。あの日フィッツがベル型スラックスをはいて教室へ入ってきた時、先生がどなりだした時みたいに。

「ミス・フィッツパトリック！」トッパー先生が言った。「いいですか。そのスラックスはこの学校の女生徒にふさわしい服装ではありません。いや、どこの学校の女生徒にもふさわしくありません。たった今、校長室へ行きなさい！」

「『ふさわしくない』ってどういう意味ですかあ？　この方がミニスカートよりもずーっといいでしょう！　こっちの方がもっと上品だもん。どうしてミニスカートは許可してスラックスはいけないのよ？　少なくともスラックスの方が、かくすじゃん！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com